

## 稲で地域を豊かにする黒龍江省方正県

斎藤 春夫

方正県や黒龍江省との農業交流の可能性を探るため、方正県を訪問した。

ここはかつて 1980 年代に岩手県沢内村の農家、藤原長作さんが自分の持てる稲作り技術のすべてを伝えたところだ。「干育疎植栽培」（健苗作りと疎植植え）を特徴とする藤原式稲作の実験田がこれまで得たこともない高い収量を上げたことで、多くの農家に支持者が広がったところである。藤原さんのことは今回お会いした黒龍江省や方正県の方々の胸の内に強く刻まれていた。

藤原長作さんは経済的、財産的に恵まれた環境で育たなかった。米を食べたい、親や兄弟、村人に米を腹一杯食べさせてあげたいという気持ちから、必死に炭焼きでお金を貯めて田んぼを買い、雑穀が主体であった沢内村という寒冷高地の中で米作りを進めた方だ。1955 年（昭和 30 年）には米作日本一に輝いた。ところが、1970 年から始まった減反政策の中で自分の情熱の振り向け先を失った。悔しさと怒り。それが黒龍江省の農家と一緒に思う存分米作りをしてみたいという願いに結びついたのである。

指導の報酬を受け取らず、農家に泊まり込み、農家から借りた実験田で自ら育苗、田植え、除草など作業の先頭に立ち、それまでの地域の最高収量 200kg を何倍も超える収量実現に成功した。その後数年で、彼の「干育疎植栽培」による高収量実現と所得向上は、省内全域はおろか中国全土に広がった。この詳細は長編の半ノンフィクション小説『米に生きた男—日中友好水稻王 藤原長作』（及川和男、筑波書房、1993 年）に詳しい。

私たちの一行は、方正県で最初に藤原さんが実験田を行った村（富裕村）で稲を見た。すでに手植えではなく田植機田植えに変わっていたが、藤原さんの精神である健苗疎植の心は生きていた。田植機が普及したばかりの頃の日本では育苗箱一枚に 200g も 250g も播いて株内過密、栽植密度過密となるのが普通であったが、お話を聞いた于有山さん(45 歳)は 150g 播きだという。坪 70~80 株植えくらいだから、過密栽培にはならない。この于有山さんが 10 歳代の頃、後ろの家に藤原さんが寝泊まりして稲の指導をしていたと言う。小さいから直接に指導を受けたのではないのだろうが、村にはその精神が伝わっていると感じられた。

方正県の水稲普及センター所長の蔣立德さんは方正県の稲作りの精神を受け継いでいる熱血漢だった。「明日の朝 6 時に、私のセンターが指導しているモデル田んぼを見に来ないか。」と夕食会で言われたときには耳を疑った。初めて会ったばかりなのに、早朝から案内してくれると言うのだから。

お言葉に甘えてモデル田んぼに行った。周辺ではいもち病や倒伏が見られるのに、モデル田んぼにはそれらはなく、葉も穂もきれいな熟れ色をしていた。ムー当たり籾で 1000kg とれる予定だという。10a に直すと 1500kg である！「田んぼの土壌分析して肥料分を量り、その田んぼに合わせた肥料を工場で製造してもらおう」と聞かされた。その土壌のサンプリングには普及センターの職員全員 27 人が当たるという。

蒋立德所長は機械化段階に入った方正県の稲作を安定させたい。また有機稲作の方向を進めたい。そして黒龍江省の農家・合作社の所得安定をはかりたい。

モデル田んぼのそばには大きな「稲作博物館」が建設中だった。なんと世界の稲作文化、中国の稲作文化を集めるという。藤原長作さんとの歴史的交流も入れるという。方正県は、米という歴史的文化的資源をベースに地域を豊かにしようとしていた。

(さいとう・はるお：1947 年東京生まれ。1972~2010 まで農文協に在籍。1999 年以降、河北省、江蘇省、山東省などとの農業交流にも参加。(社)日中科学技術文化センターに届いた方正県からの日本との稲作交流の打診を受け、5 人の団の一員として黒龍江省を初めて訪問した)



方正県の農家、于有山さん



左から筆者、蒋立德さん、  
陳福堂さん（方正県外事弁公室）